

古代ギリシアのエピダウロス巡礼

—— アスクレピオスの治療祭儀 ——

山 川 廣 司

はじめに

古代ギリシアの巡礼は、四国遍路のような複数聖地を巡回する巡礼とは異なり、特定の地域を往復する単一聖地巡礼の形を取っており、また巡礼の内容もさまざまであった。例えばデルフォイ（アポローン神）やドドナ（ゼウス神）に代表される神託は祭儀、開戦、和平、植民、国制など国家にとって重大な事柄から、結婚、病気、商売など私的な問題に至るまで幅広く神託が求められ、国内外から多くの使節が来訪したが、これらは公私の運命の決断を神の裁可に求めてなされた巡礼であり、また民族の4大祭典としてヘレネスの意識を高揚させたオリンピア競技（ゼウス神）・ピュティア競技（アポローン神）・イストミア競技（ポセイドーン神）・ネメア競技（ゼウス神）に代表される神前にスポーツや文芸の技を奉納するための巡礼、そして今回採り上げる病気の治癒を求めて医神アスクレピオスの聖域を訪れる巡礼などが挙げられる。

本報告では古代ギリシアにおける巡礼活動の1つであるエピダウロスに展開したアスクレピオス信仰を概観し、宗教に関わる古代ギリシア人の心性について考えたい。

1. アスクレピオスとエピダウロス

伝承によれば、アスクレピオスは預言の神アポローンとメッセニア人レウキッポスの娘アルシノエー（Hesiod., *Fr.*50）あるいはテッサリア王フレギュアースの娘コロニス（Pind., *Pyth.*3）との間に生まれた子となっているが、その出生地についてはテッサリアのトリッケとエピダウロスが挙げられる。彼はアポローンによって母を殺された後、ケンタウロス族のケイローンから医術を学び、やがて名医となって死者をも蘇らす力を持つに至り、天地の常道の逸脱を恐れたゼウスの雷霆に打たれ、星座（蛇遣い座）となったと語られている。

エピダウロスでのアスクレピオス崇拝は青銅器時代に遡るとされるが、その発展は後期アーケイック期に始まる。古典期にはその崇拝は隆盛し、エピダウロスが一大中心地となり、ヘレニズム期を頂点にローマ期まで続いた。ペロポネソス戦争最中の420年 BC 頃疫病が流行したアテナイのアクロポリス南麓にアスクレピエイオンが分祠され、4 世 BC 頃にアルキアスのよりペルガモンへ、さらに293～291年 BC に疫病が大流行したローマのティベレ島にも分祠され、治療祭儀としてのアスクレピオス崇拝は各地に広まっていった。そしてコス島やクニドス島ではアスクレピアダイ（Askepiadai）と呼ばれた神官団（医師団）が治療に当たったと言われている。

エピダウロスの遺跡は主として紀元前 4 世紀の建築に属しているが、その聖域（temenos）はアスクレピオス神殿、アルテミス神殿、イシス神殿、アフロディテ神殿、テミス神殿などの神殿群、アバトン（Abaton、至聖所）やトロス（Tholos）などの医療施設、カタゴゲイオン（Katagogeion）と呼ばれる宿泊施設、パラエストラ（Palaestra、体育場）、ギムナジウム（Gymnasion、屋内競技場）、公衆浴場、図書館、ストア

などの社会施設などが広範囲に建立されていた。またアスクレピオスを讃えて4年毎に開催されたスポーツと音楽の祭典は、オリンピアのスタディオン（191m）に匹敵する長さ181mの直線コースをもち周囲が馬蹄形のスロープに囲まれたスタディオン（Stadion）やその音響効果で絶賛されている14000人収容の野外大劇場で催され、現在でも遺跡から往時の繁栄ぶりが窺われる。

2 エピダウロスにおける治療祭儀

アスクレピオスによる治療を求めてギリシア各地からエピダウロスを訪れた巡礼者たちは、町から9km離れたキュノルティオン山麓の揺り鉢状の谷間に広がる聖域を目指した。聖域の入口プロピュライアを通して聖なる道を進み、アスクレピオス神殿などが立ち並ぶ一角にあるアバトンに入り、そこで最初の夜を過ごした。全ての巡礼者が入場を許可されたわけではないが、男性は東側部分、女性は西側部分に分けられ、寝床を作った。睡眠の儀式に就く前に患者は冷水で身を清め、伝統に従って夢見を促進すると考えられていた白衣に着替えた。眠りに就く前に、睡眠と夢見を促進するための一服が与えられた。アバトン内部は薄暗く、蝋燭やランプの光での揺らめきは正面のアスクレピオス像の荘厳さを高めたが、その壁面には無数の奉納絵額や体の部位の奉納品が飾ってあった。白いヘアーバンドを付けた神官団が蛇と犬を伴って患者の間を循環していた（図1）。アスクレピオスが訪れ、治療を施したり、触診したり、処方箋を与えたりするいわゆる奇跡治療はこの夢見の時に行われた。翌日神官団はその夢を聞いてカルテを作り、治療に当たるとされている。

治療の施設と推測されるトロスは紀元前4世紀に建てられた円形建造物であるが、その使用は今日でもよくわからない。基礎部分は同心円を描く本格的な迷宮をなしており、円は開口部で互いに結ばれており、一番外側の円から中心点に到達しようとするれば、ここ円に沿って全部を歩き尽くさねばならない。儀礼的周行を行った後で中心点に達するとそこから上部の建物に上がることが許された。この上部の建物は外側はドーリア式の列柱、内側がコリント式の列柱の2列の柱廊にはさまれた丸い外壁から成り立ち、東側に入口があり、外壁の頂には見事な装飾が施されていた。建物の外側は多色に塗られ、丸い外壁の内側の基部は黒大理石で出来ていた。発掘者はこれを秘儀の挙行に使用された建物と見なしている。一説では、精神神経症の患者のショック療法に用いられたとされ、それは後にキリスト教に採用され、今日の心理療法に発展したと言われている。

初夜をアバトンに籠もり、夢見でアスクレピオスの診断告知や治療を受け、翌日から神官団（医師団）による治療を受けながら、ギムナジオンやパラエストラ、スタディオンでスポーツを、公衆浴場、図書館で余暇を、そして野外劇場で悲劇や喜劇などの演劇を楽しみ、心身のリフレッシュを図った。このように来訪者は滞在中に非日常的経験を味わうことで外科的治療と並んで精神的解放を行った。そして病が治癒した時、感謝の気持ちを持って再び聖地を訪れ、お礼銘文や治療を受けた体の部位の奉納品を納めたことはエピダウロス出土の奇跡治療碑文や実際の出土品（図2～7）によって知ることができる。

3 アポロン・アスクレピオスによる奇跡治療の碑文

公式の治療一覧表銘文（3枚がアバトンより発見）は *Inscriptiones Graecae* (IG) IV²,1, nos.121-122（紀元前4世紀後半）および W.Dittenberger, *Sylloge Inscriptionum Graecarum* (SIG) の史料集に掲載されている。ここではその幾つかの碑文を列挙する。（注：最初に記載されている[]内のローマ数字はIGの史料番号である）

まず冒頭の書き出しは、

(1行目) 神 (Theos)

幸運 (Tucha agatha)

(2行目) アポローンとアスクレピオスによる治療の数々

とあるが、内容は直接アポローンによって施された治療記述はなく、すべてアスクレピオスの奇跡治療に関わるものである。

[I] 5年間妊娠したクレオ Cleo (SIG 1168 3-10)

彼女は5年間妊娠しており、嘆願者として神(アスクレピオス)の許を訪れ、アバトンで眠った。彼女はそこを離れ、聖域の外に出ると直ぐに男児を生んだ。その赤子は誕生後すぐに泉の水で自分の体を洗い、母と一緒に歩いていった。その幸運の返礼に彼女は感謝の献納を刻文した。「この銘刻板の大きさにではなく、神の偉大さに驚嘆せよ。その聖域で眠るまでクレオは5年間子宮の中に苦悩を抱きかかえていたが、彼(アスクレピオス)が彼女を元気にした」と。

[IV] アテナイからきた片目が見えないアンブロシア Ambrosia (SIG 1168 34-42)

彼女は嘆願者として神のところにやってきたが、神殿を歩き回っていた時、ただ夢を見ることで健康を取り戻した不慮者や盲人の治療を信じられない、不可能なことと言って嘲笑した。眠りにつくと彼女は夢を見た。神は彼女の側に立ち、お前を健康にはするが、その無知の記憶として、神殿に銀製の豚を奉納しなければならぬと述べたように思われた。こう言った後、神は彼女の病んだ目を切開し、軟膏を塗った。夜が明けると彼女は元気になって立ち去った。

[V] 唾の少年 (SIG 1168 42-48)

彼は嘆願者として声の回復を願って神域にやってきた。彼が手始めの犠牲を行い、通常の儀式を果たした直後に、その神のために火を運ぶ神殿の召使いが少年の父親を見ながら、大願成就したなら、1年以内に治療への感謝の献納物を持参するよう求めた。ところが少年が突然「私は約束します」と言った。父親はこれに仰天し、もう一度繰り返すよう頼んだ。少年はその言葉を繰り返し、その後治癒した。

[VI] 額に痣をもつテッサリアの人パンドロス Pandaros (SIG 1168 48-55)

彼は眠りにつくと夢を見た。そこで神は痣の回りにヘヤーバンドを巻き付け、アバトンを離れた時それを取り外し神域への奉納物として献納するよう命じた。夜が明けると彼は起きあがり、バンドを取り去ると痣のない顔を見たように思えた。そして彼は以前額に持っていた印(痣)のあるバンドを神殿に献納した。

[VII] エピダウロスの少年エウファネス Euphanes (SIG 1168 68-73)

彼は胆石を患い、聖域で眠った。神は彼の側に立ち、尋ねた、「もし君を治療したら何をくれるか」と言ったように思われた。少年は「10個の賽子(ナックルボーン;羊の趾骨などで作ったお手玉に似た子供の遊具)」と答えた。神は笑って治療することを約束した。夜が明けると少年は元気になって立ち去った。

[XII] エウヒッポス Euhippos は6年間槍の穂先を顎に付けていた (SIG 1168 95-97)

彼が聖域で眠ると神が槍の穂先を引き抜き、それを彼の手の中に入れた。夜が明けるとエウヒッポスは治療されて出ていったが、手の中に槍の穂先を握っていた。

[XVII] 蛇に足の指の治療をされた男 (SIG 1168 112-119)

彼は足の指に広がる悪性潰瘍のため体調がひどく悪く、日中神域の召使いたちに外に運び出され、安楽椅子に座っていた。彼が眠りに襲われると、一匹の蛇がアバトンから出てきて、舌で彼の指を治療し、その後またアバトンへ戻っていった。彼が目を覚まして元気になった時、自分は夢を見た、美しい容姿の若者に膏薬を指に塗ってもらったように思われる、と語った。

[XXI] 水腫にかかったラケダイモンの婦人アラタ Arata (SIG 1169 1-8)

彼女がラケダイモンに留まっている間、母親が彼女のために神域で眠り、夢を見た。神が娘の頭を切り離し、喉が下の方にくるように体を吊した。喉から大量の液体物が流れ出た。それから神は体を元の位置に戻し、頭を首の部分とつなぎ合わせたように思われた。母親は夢を見た後ラケダイモンに戻り、娘が健康になっているのを見た。娘も同じ夢を見ていた。

[XXII] タソスのヘルモン Hermon (SIG 1169 8-10)

彼の盲目がアスクレピオスによって治療された。しかしその後彼はお礼の献納物を持っていなかったの
で、神は彼を再び盲目にした。彼は聖域に戻ってきて、再び神殿に眠ると神は彼を快復させた。

[XXIII] トロイゼンのアリストゴラ Aristagora (SIG 1169 10-19)

彼女の腹部にはサナダムシが寄生していた。そこでトロイゼンのアスクレピオス神殿で眠り、夢を見た。神（アスクレピオス）がここを離れて不在でエピダウロスにいたので、彼の息子たちが頭を切り離したが、再び元に戻すことができなかった。彼等はアスクレピオスの許に来てくれるよう依頼の使者を送った。そう
こうしているうちに夜が明け、神官は彼女の頭が体から切り離されているのを見た。夜になるとアリストゴ
ラは夢を見た。神がエピダウロスからやって来て、頭を首に固定したように思われた。それから彼はお腹を
切り開き、サナダムシを取り出し再び縫い合わせた。その後、彼女は元気になった。

[XXIX] 頭痛に悩むハゲストラトス Hagestratos (SIG 1169 50-53)

彼は頭痛から来る不眠症に悩まされていた。アバトンにやって来て眠りにつく夢を見た。神は彼の頭痛
を治し、それから彼を裸で立たせ、パンクラティオン（格闘技）で使われる突きを教えたように思われた。
夜が明けると彼は元気になって立ち去ったが、その後まもなくネメア祭の競技においてパンクラティオン種
目で勝利した。

[XXX] 膿を持つヘラクレイアの人ゴルギアス Gorgias (SIG 1169 56-61)

彼は戦いで肺に矢が当たり、傷を負っていた。1年半体調が非常に悪く、膿が出て、膿で鉢が67杯も一杯
になった。聖域で眠りについて夢を見た。神が肺から矢の穂先を抜き取ったように思われた。夜が明けると、
彼は元気になって手に矢の穂先を握って立ち去った。

[XXXI] エペイロスのアンドロマケ Andromache の不妊治療 (SIG 1169 61-64)

彼女は聖域で眠って夢を見た。夢の中で1人の美しい少年が彼女の衣服を取り去ると、その後、神が手で
彼女に触れた。それから間もなくアンドロマケは夫アリュバス（エイベロス王）の子を出産した。

[XXXIII] 肺病を患ったハリエイスの人テルサンドロス Thersandros (SIG 1169 69-83)

彼が聖域で眠りにつき夢を見た。彼は荷馬車でハリエイスに連れ戻された。しかし聖なる蛇の1匹が馬車に乗り込み、その旅のほとんどの間車軸の周りに蟻局を巻いていた。ハリエイスに着くとテルサンドロスは家のベットで休んだ。その時蛇は馬車から降り、テルサンドロス进行治疗した。ハリエイスの町（ポリス）がその起こった出来事について問い合わせをした。その蛇についてエピダウロスに返すべきか、この領地に留めておくべきか困惑していた時、この町はどうすべきかについて神託を求めてデルフォイに使者を送ることを決定した。その神（アポローン）は、蛇はその町に留め、アスクレピオスの聖域を建て、彼の像を造り、神殿にそれを建立すべきであると託宣した。神託が伝えられた時、ハリエイスの町の人はアスクレピオスの聖域を建て、その他のアポローンの命令にも従った。

[XXXVI] セフィシ阿斯 Cephisias が足で・・・ (SIG 1169 95-102)

彼はアスクレピオスの治療を嘲笑し、言った。「もし神が足の不具な人々进行治疗すると言うなら彼は嘘をついている。なぜならもし彼がそうする力を持っているなら、なぜヘフェイストス进行治疗できないのか」と。神はそのような無礼に罰を科すことを隠さなかった。というのはセフィシ阿斯が馬に乗っている時、鞍にくすぐったかった強情な馬に蹴られ、即座に足が不具になり、担架に乗って神殿に運ばれてきた。後に彼が熱心に治癒を懇願すると神は彼を元気にした。

[XLII] メッセネのニカシブラ Nicasibura の不妊治療 (SIG 1169 129-133)

メッセニア地方のニカシブラは子の恵みを授かるために、聖域で眠りにつく夢を見た。夢の中で神は1匹の蛇を従えて彼女のもとを訪れ、彼女はこの蛇と交わった。それから1年後に双子の男子を授かった。

これらの奇跡碑文から、エピダウロスの聖域で行われていた治療の様子をまとめてみると、第1に妊娠あるいは出産の促進は聖域内で行われたが、ケレーニー（『医神アスクレピオス』51-51頁）が言うように出産は治療を要する病気ではないからか、あるいは出産に伴う出血が汚れと見なされていたからかはわからないが、出産そのものは聖域外でなされていた。第2にアルキノスによって奉納された浮彫板（図2）にも描かれているが、夢の中でアスクレピオスによって手術などの治療が施されているが、実際は蛇によって治療がなされている。第3にアスクレピオスは症状に現れる病気の治療ばかりでなく、その根本原因となっているストレスを除去すべく例えばスポーツの技を授けるなどの処置を施している。第4に患者本人は聖域に行かず、代参者が聖域に出かけてアスクレピオスに懇願することで、遠隔地から治療が施すこともあり得た。第5に病気が治癒した患者はお礼の奉納を行うが、時にはそれを怠った場合あるいは神を侮辱した場合は再び病がぶり返すこともあった。またアスクレピオス自らが治療のお礼を求める場合やお礼の奉納品を指定する場合もあった。これらの奇跡碑文の内容については別途考察する必要がある、ここでは碑文紹介に留める。

4 ギリシア人の心性

ターナーによれば、カトリックの巡礼の主体は、信仰の「外的表現」を求める民衆であった。民衆を中心とする巡礼者は脱俗儀礼によって世俗社会から一時的に切り離された半俗半聖の身分となり、巡礼者相互の兄弟愛と団結を基に、平等と同質性を特徴とする巡礼講のようなコミュニタス（共同体）を組織する。こうした巡礼者が、来世での救済と奇跡による病気治癒（下線報告者）などを願い、聖遺物に触れながら人類史の原点に回帰しようとした贖罪の旅が巡礼であり、それは聖地において頂点に達する。聖遺物の横溢する「聖なる空間」の中で実践された苦難の長旅を通じて、巡礼者は回心し、再び世俗社会に回帰する。従って

巡礼は俗⇒聖⇒俗という過程をたどる回心のための通過儀礼であるとともに、聖地での神との直接的交感を求めた「外化された神秘主義」でもあった。「外化された神秘主義」としてそれは、既成秩序からの解放を求める民衆運動としての一面も有していたとされている（関哲行、「序」19-20頁）。ヨーロッパ中世のカトリック社会での巡礼は贖罪の旅であり、そこでは奇跡による病氣治癒などの現世利益と来世での救済という2側面が指摘できる。

一方、古代ギリシアにおいては、神々は何処にでもおり、あらゆるものに存在するという多神教の世界であった。ギリシア人にとって重要なことはそれらの神々の好意を得ることであり、そのために具体的に行動することが重要であった。逆に神々にとって重要なことは人間から何を受け取るかと言うことであり、従って敬神とは神々が望むものを与えることであった。このようにギリシアにおける宗教の目的は来世の生活での至福よりも現世の日々の生活における振興を確実にすることであった（R.Garaland, pp.131-132）。このようなギリシア人の来世観はホメロスの英雄叙事詩『オデュッセイア』（*Od.* XI 488-491）にもみられる。地上から暗く陰鬱な冥界に降りたオデュッセウスと面会したアキレウスは「栄えあるオデュッセウスよ、死を繕うことはやめてくれ。すべての命のない死人の王となるよりは、生きて暮らしの糧も余りない土地を持たぬ男の農奴になりたいものだ。・・・」と語り、死後は冥界に降り死者たちの支配者となるよりも、例え小作人の下僕としてでも現世での生活を選ぶと生への執着を示している。またハーデースが支配する死者の国は、ホメロスではオケアノスの流れの彼方の極西にあったとされるが、ヘシオドスの『労働と暦日』（*Erga kai Hemera*）に述べられる5つの時代では、第1の黄金の種族は死後地上の善き聖霊となり、人間の守護神として霧に身を包み、地上を隈無く徘徊しつつ裁きと悪行とを監視し、人間に富を授けるが、第2の銀の種族は地下に住み、至福なる人間と呼ばれ、先の種族には劣るとはいえ、彼らにも栄誉は授けられていた。第4の英雄の種族は人の世から離れた大地の果てに、命の糧と住居を与えて住まわせられた（～168）。かくてこれらのものたちは、心に何の憂いもなく、深く渦巻くオーケアノスのほとり、「至福者の島マカローン・ネーソイ」に住んでいるが、それに対して第3の青銅の種族は互いに打ち合って倒れ、身も凍る冥界（ハーデース）のかび臭い館へ、名を残すことなく降って行き、第5の鉄の種族に至ってはアイドース（廉恥）とネメシス（義憤）の二神にも見捨てられ、悲惨な苦悩のみが残り、災難を防ぐ術もなかりと嘆いている。このように古代ギリシア人の来世観は、仏教やキリスト教に見られる死後の世界は天国と地獄といった二元世界とは見ず、死後は地下に存在する冥界を彷徨うのであり、現世での善行を積むことで来世において救済され天国で安寧に過ごせるといった考えはない。むしろ死後の世界に対しては暗く陰鬱なイメージを抱き、積極的な評価を行っていない。

終わりに

以上古代ギリシアにおける巡礼について簡単にまとめてみたい。

第1に古代ギリシアは多神教の世界で、信仰には寛大であった。そして彼らにとって重要なのは、先祖伝来のしきたりに則り、宗教儀礼を実践することによって神々への敬虔を示すことだった。実際古代ギリシアでは祭儀を含め大小の宗教儀礼が各地で頻繁に行われ、それへの参加・参拝のため、平素はポリスに分立していたギリシア各地からの巡礼活動も活発に行われ、その内容も多種多様であった。

第2に、とはいえ、古代ギリシアの巡礼活動は現世利益を求めて行われた点では共通性が見られる。キリスト教においては来世での救済が巡礼活動の1つの重要な要素となるが、古代ギリシアの巡礼活動においては来世での幸福という考えはない。ひたすら現世における福利の追求がなされたといえる。ギリシア人が神に期待したものは、キリスト教に見られるような一方的な愛（アガペー）ではなく、相互授受の原理に則っ

た崇拜であった。現世利益を求めて嘆願し、成就した暁にはお礼を捧げたのであった。

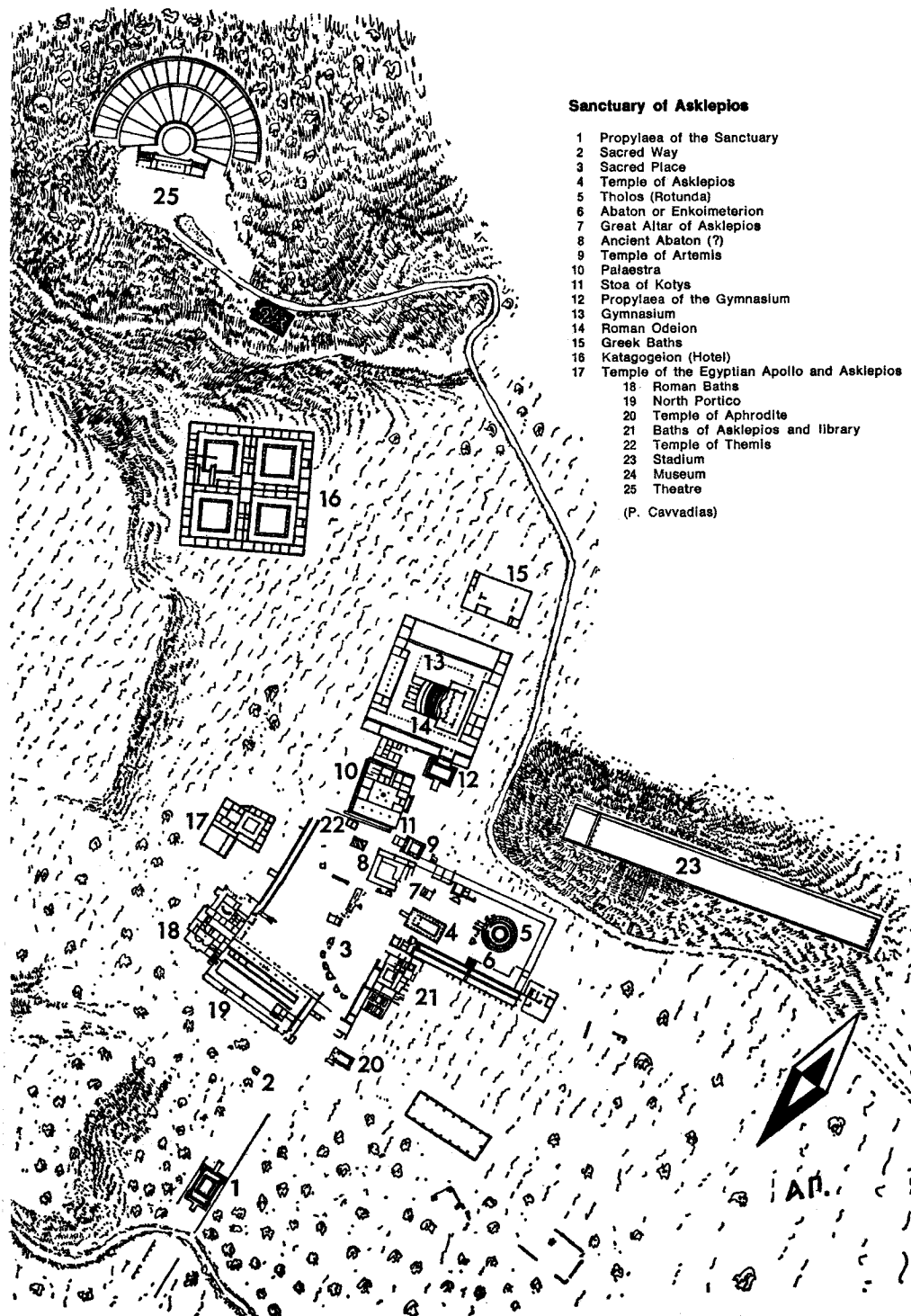
第3に巡礼はこのような神聖な儀礼への参加という大義名分で行われたが、一方で非日常的経験による心身のリフレッシュも図られた。その典型例として挙げられるのがエピダウロス巡礼であった。エピダウロスははじめギリシア各地で行われたアスクレピオス崇拜は、病の治癒とそのお礼詣りという一般の人々の生活に密着した巡礼活動であった。前述のように病を持った人々がアスクレピオスの聖域を訪れた初夜アバトンに籠もり、夢見でアスクレピオスの診断告知を受け、翌朝それを受けて神官団が治療法を決めた。トロスなどを中心に治療が進められる一方、彼らはギムナジウムやパラエストラ、スタジオでスポーツを、公衆浴場、図書館で余暇を、そして野外劇場で悲劇や喜劇などの演劇を楽しみ、いわばエピダウロス滞在中、心身のリフレッシュを図った。このようにエピダウロスをはじめとするアスクレピエイオンにおいては、物理的・外科的治療のみならず精神的解放も行い、恐らく来訪者にとっては滞在期間中、非日常的な経験を味わうことで心身の再生を行ったものと思われる。そして後日改めて治癒のお礼に奉納品を持って再び聖地を訪れたのであろう。

今回採り上げたエピダウロス巡礼は、現世利益の側面が最もはっきり現れるギリシア人の宗教活動であった。しかし古代ギリシアにはその他にもデルフォイ巡礼など重要な問題が残されている。それらについては今後の研究課題としたい。

<参考文献>

- ・関 哲行、「序」：歴史学研究会、『地中海世界史 4 巡礼と民衆信仰』青木書店、1999年。
- ・渡邊昌美、「第1章 巡礼総論—奇跡、聖者、聖遺物、そして巡礼」：同上書
- ・川原温、「中世ローマ巡礼」：同上書
- ・関 哲行、「中世サンティアゴ巡礼と民衆信仰」：同上書
- ・渡邊昌美、「ヨーロッパの巡礼」：懷徳堂友の会編、『道と巡礼』和泉書院、1993年。
- ・高津春繁、『ギリシア・ローマ神話辞典』岩波書店、1960年。
- ・パウサニアス、馬場恵二訳、『ギリシア案内記』下 岩波文庫、岩波書店、1992年。
- ・カール・ケレーニイ、岡田素之訳、『医神アスクレピオス』白水社、1997年。
- ・澤田祐介、『蘇る医神アスクレピオス』医歯薬出版KK、2001年。
- ・川島重成、『ギリシア紀行 歴史・宗教・文学』岩波現代文庫、岩波書店、2001年。
- ・齋藤貴弘、「紀元前5世紀後半のアテナイにおける宗教と民衆」『史学雑誌』第106編 第12号、1997年、35-59頁。
- ・S.Hornblower & A.Spawforth eds., *THE OXFORD CLASSICAL DICTIONARY*, Oxford, 1996³, Asclepius の項
- ・F.Hiller de Gaertringen ed., *Inscriptiones Graecae*, vol.IV, Walter de Gruyter & Co., 1929/77.
- ・W.Dittenberger, *Sylloge Inscriptionum Graecarum* III, Georg Olms, 1982.
- ・Emma J.Edelstein & Ludwif Edelstein, *ASKLEPIUS Collection and Interpretation of the Testimonies*, The John Hopkins UP, 1945,1998.
- ・C.Voutsas, *EPIDAUROS AND MUSEUM*, Athens.
- ・O.Reverdin & B.Grange eds., *Le Sanctaire grec*, 1992.
- ・J.Ferguson, *Greek and Roman Religion A Source Book*, Noyes Press, 1980.
- ・R.A.Tomlinson, *Greek Sanctuaries*, Elek Books Ltd., 1976.
- ・A.Burford, *The Greek Temple Builders at Epidauros*, Liverpool University Press, 1969.

- Matthew Dillon, *Pilgrims and Pilgrimage in Ancient Greece*, Routledge, 1997.
- James Longrigg, *Greek Medicine from the heroic to the Hellenistic Age*, a Source Book, Routledge, 1998.
- Robert Garland, *Daily Life of the Ancient Greeks*, Greenwood Press, 1998.
- Simon Price, *Religions of the Ancient Greeks*, Cambridge UP, 1999.
- Gerald D Hart MD, *Asclepius—the God of Medicine—*, the Royal Society of Medicine Press Limited, 2000.
- Richard Buxton ed., *Oxford Readings in Greek Religion*, Oxford UP, 2000.
- Vivian Nutton, *Ancient Medicine*, Routledge, 2004.



出典：C.Voutsas, *Epidauros and Museum*, p.16.

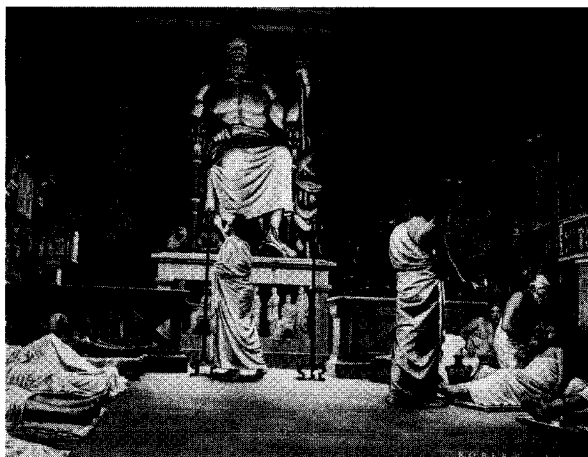


図1 アバトン内の初夜の想像図
出典：G.D.Hart MD, *Asclepius*, p.81.



図2 夢見の場面と実際の治療場面を描いた奉納浮彫板
(アテネ国立考古学博物館蔵)
出典：G.D.Hart MD, *Asclepius*, p.137.

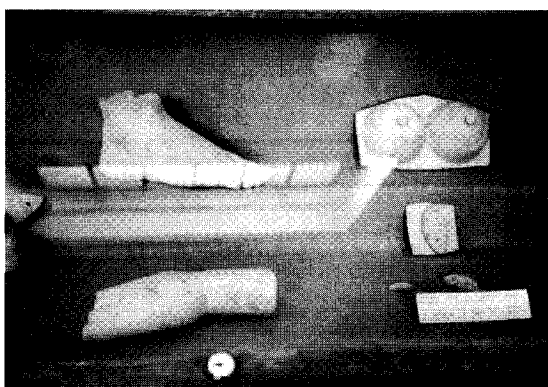


図3 患部治療のお礼のテラコッタ製奉納品（上・下）
(コリント博物館 筆者撮影)



図4 ピレウス出土の治療を施しているアスクレピオスを描いた奉納浮彫板（アテネ国立考古学博物館蔵）
出典：G.D.Hart MD, *Asclepius*, p.103.

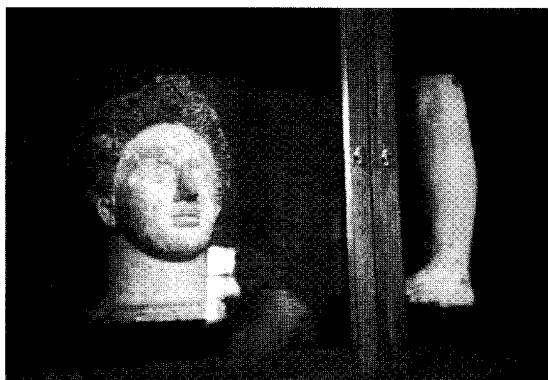


図5 外科手術具を描いたアテナイ・アスクレピエイオンからの医者の墓碑の浮彫（アテネ国立考古学博物館蔵）
出典：G.D.Hart MD, *Asclepius*, p.89.



図6 大量生産された
テラコッタ製子供の足型
出典：G.D.Hart MD, *Asclepius*, p.95.



図7 患部（足）治療感謝の奉納品
(アテネ国立考古学博物館蔵)
出典：G.D.Hart MD, *Asclepius*, p.95.